S. Ashina

＜前回・オリエンテーション＋導入＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想研究入門――キリスト教思想研究入門・宗教改革以降

Ｄ．確認事項

受講者には、一回の研究発表が求められる（キリスト教学学部生には原則的に発表が求められる。ほかの者はレポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（金３、４）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

＜導入＞ 近代キリスト教とその諸問題

http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/59276

１　問題

２　近代とポスト近代

（１）いつから近代か

・トレルチの近代論、とくに近代の時代区分の議論で注目すべきは、おおよそ 17 世紀までと 18 世紀以降において区切られた古プロテスタンティズムと新プロテスタンティズムの区別である。これは、次の引用が示すように、近代が宗教改革とルネサンスという二つの基本的傾向によって規定されていること、そして、厳密な意味における近代が啓蒙主義から始まるということを意味する――古と新という二つのプロテスタンティズムの区別は、この啓蒙主義の以前と以降に対応する――。

・ここで問題となっている啓蒙主義とは、単なる政治思想や思想運動を超えて、「生の全領域にわたる文化の全面的変革」（eine Gesamtumwälzung der Kultur auf allen Lebensgebieten, ibid., 339）を意味しており、「国家契約説」（国家の神学的基礎の破壊）、「近代の寛容国家」「教会の自然法的解釈」、「政治的、経済的、そして精神的自由を欲求する市民階層」、「新しい経済理論および社会理論」「重農主義」、「自然道徳」「自然宗教」、「新しい数学的・機械論的自然科学」、「コモンセンスや自然主義」、「啓蒙文学」、「新しい教育制度」、「啓蒙主義の神学」といった広範な諸契機を統合するものと理解されねばならない。(2) この啓蒙主義がもたらした変動は、近代を二つの時期に区分するものとなり、プロテスタンティズムもそれぞれに対応して、古と新に分けられることになる。つまり、「正統信仰もしくは国家教会としての古プロテスタンティズムと、近代思想によって縦横に浸透された自由教会的、平等的な新プロテスタンティズム」（Troeltsch, 1913a, 191）の二つのプロテスタンティズムである。

・ティリッヒは、トレルチの論じた啓蒙的近代の特徴を、トレルチ同様に、(3)「数学的自然科学、技術、経済」の「三重の活動性」（dreifacche Tätigkeit）とその担い手としての「市民社会」として捉え（Tillich, 1926, 32-36）、また啓蒙主義に関しても、その内実について、理性概念（普遍的、批判的、直観的、技術的理性）、自然概念（超自然に対する）、調和概念（世界観的、教育的、経済的）という観点から分析を行っている（Tillich, 1972）。

しかし、ブルジョワ社会、つまり近代について、革命（17-18 世紀）、勝利（19 世紀）、崩壊・変容（20 世紀）という三つの段階を区別していることからもわかるように（Tillich, 1945）、ティリッヒの関心は、革命とその勝利の中から形成された 18 世紀以降の近代がどのように崩壊・変容し――啓蒙主義の成立とその内的な葛藤、そして諸伝統の総合の試み

とその挫折――、また現代の錯綜した動向の中に、どのような新しい精神状況の萌芽を見いだしうるか、という点に向けられている。つまり、ティリッヒの世代はトレルチの世代以上に、近代世界の崩壊（第一次世界大戦と革命）の実感の中で、近代以降の（その意味では、ポスト近代の）精神的動向に関心を払っていたのである。宗教社会主義の構想、現象学と存在論への注目、実存思想への共感、そしてポスト・プロテスタント時代の展望、科学と宗教との対立図式の克服、といったティリッヒの一連の思想的試みは、こうした思想的文脈に位置付けることができるであろう。

・トレルチとティリッヒの近代論は、さらに次の世代のキリスト教神学者パネンベルクへと受け継がれる。パネンベルクの思想内容は多岐にわたるが、ここでは、パネンベルクの議論の特徴が、16 世紀の宗教改革から 18 世紀の啓蒙的近代に至る歴史的過程の分析にあることを指摘しておきたい。パネンベルクは、『ドイツにおける新しい福音主義神学の問題史』（Pannenebrg, 1997）において、19 世紀のドイツ・プロテスタント神学の問題状況を規定するものとして宗教改革後の宗教戦争の帰結、つまり教派的多元性の状況に注目している。

・以上、トレルチからティリッヒ、そしてパンネンベルクに至る 100 年にわたるキリスト教思想における近代論を概観してきたが、そこからわかるのは次の点である。近代とは、諸伝統の緊張関係に規定されて展開した、中世からポスト近代へと至る動的プロセスであるが、それ自体の中にいくつかの決定的な変遷・段階的区分が認められる。つまり、近代とは単純な一様性において理解できるのではなく、諸伝統と諸領域（諸サブシステム）のゆるやかなネットワークとでも言うべき構造と動的プロセスとによって、捉えられねばならないのである。

（２）時代区分の客観性？

・これまでの議論からわかるように、動的プロセスとしての「近代」という歴史時代を、一義的かつ客観的な仕方で前後の歴史時代から区別することは困難である。これは、近代のみならず、時代区分全般に対して指摘されねばならない事柄であり、いわゆる弁証法的歴史理論の主張する歴史理解に他ならない。

（３）時代区分する研究者の視点

・時代区分は、単なる主観の問題ではないとしても、一義的な客観性によって規定できる問題ではない。歴史的展開過程の中に現れたどの要素に注目するのか、何を指標にして時代区分を行うのか、に関わる研究者の側の視点をぬきに、時代区分を論じることはできない。つまり、時代区分する際に注目されるメルクマールの設定という問題である。

・近代という時代区分を考える際に重要になるメルクマールとして、近代というシステムを構成する諸サブシステムに注目。

　しかし、サブシステムがその後世界的規模で展開してゆく際に、それらの移動と定着について、サブシステム間にかなりの時間差が生じていることがわかる。一般に、近代科学の移動と定着はもっとも早く、それに資本主義的経済システム（市場経済）が続き、民主主義的システムはもっとも速度が遅いように思われる。

・　したがって、キリスト教思想の観点から近代あるいはポスト近代を論じる場合、近代のメルクマールをどのように設定するのか、またそのように設定する理由は何かが、明確化されねばならないのである。

　テオドール・ウォーカーの議論。ウォーカーは、大西洋を横断した近代奴隷制の成立こそが近代のメルクマール――「近代の歴史をそれ以前の歴史から区別する主要な出来事」――であることを、黒人神学（Black Theology）の立場から主張している。

２．宗教改革の思想的意義

（1）宗教改革

１．プロテスタンティズムとは何か

宗教改革はプロテスタント教会の歴史的出発点であるが、宗教学的に考えた場合、「プロテスタンティズム」に関しては、次の三つの意味を区別することができる。

・原理としてのプロテスタンティズム（宗教史の構成要素）
・歴史的プロテスタント（教派・組織として）
・プロテスタント時代（プロテスタント教会の存在によって構造が規定された時代）
　→　この意味における「プロテスタント時代」は終了した（ティリッヒ）。

２．宗教改革（ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら）とその広がり

1517 年 10 月 31 日、マルティン・ルターは、当時ザクセンで大々的に売り出されていた贖宥状（いわゆる免罪符）に対して、ヴィッテンベルク城教会の扉に「９５箇条の提題」を貼りだし、贖宥についての学問的討論を提起した。それは、カトリック教会の破門決定にもかかわらず、最初の意図を越えてヨーロッパ各地に広がっていった（思いがけない波及効果）。これは、中世後期には、ルターの問題意識に共鳴する思想状況が広く存在していたことを意味しており、宗教改革はルター個人の活動に還元できない歴史的動向と言わねばならないだろう。　→　中世の文脈における宗教改革、中世の諸伝統を無視しては宗教改革は理解できない。

３．宗教改革の思想内容（三大スローガン）→パラダイム転換（キュンク）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に連関し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない（パラダイム！）。

４．人間は何によって救われるのか？

・行為義認：人間は善行によって救われる。義人は救われる。何が善行であるかの内容は宗教において様々であるが（宗教儀礼に参加すること、隣人愛を実践すること、毎日祈り聖書を読むこと、献金を捧げることなどなど）、ほとんどの宗教において、行為義認に類した考えは確認可能である。　Q：行為義認と因果応報説の関係を論じよ。
・問題は人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を実践するが、ついに救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懐疑を至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。　cf.　贖宥の論理
・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じることによってのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、新約聖書のパウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。　cf. 法然や親鸞の思想と比較せよ。
・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論（罪や恩寵の精神性・内面性）への転換といえる。信じる心の純粋さという個人の人格性が問われることになる。
・もはや、救いは教会制度において媒介されるのではなく、神と個人との関わり合いにおいて成立することなり、またこの救いのあり方は、聖職者でも一般信徒でも変わり

がないことになる。ここに、「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関しては、神の前に平等である。これは、イエスの宗教運動における徹底的な平等主義理論の具体化と解することも可能である。

・「信仰のみ」は救いが自己の信仰的決断の事柄であること、つまり自己決定の問題であることを意味する。そして、自己決定は情報公開が前提にされねばならない（宗教改革の精神はきわめて近代的である！）。この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガンに他ならない。救いの知識は、権威ある他者から伝達されるのではなく、自分で聖書を読むことによってもたらされる。

５．理念と現実の緊張：三つのスローガンによって示された宗教改革の精神は、「理念」であって、ここに、キリスト教史において広範に確認可能な理念と現実のずれを指摘しなければならない。たとえば、聖職者と一般信徒との平等性の理念は、宗教改革の伝統に立つ教会においても、必ずしも十分に実現されていない現実がある。階層的秩序は存続している。それは、信仰の自己決定と聖書の情報公開に関しても同様である。

Q：農民戦争に対するルターの対応を、この観点から論じよ。

「最初に存在していた宗教改革の感激は、間もなく燃えつきてしまった。共同体の生活は幾重にも沈滞したままだった。「キリスト者の自由」にふさわしく成熟してない人々は、ローマの政治機構の崩壊とともに、すべての教会的な支えを失ってしまったのである。ルター派の陣営においてさえ、多くの人々が、そもそも宗教改革によって人間はどれほど立派になったのだろうか、と自問する始末だった。芸術の世界において――音楽は別として――貧困化したことも見逃せない。」（ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち　パウルからカール・バルトまで』新教出版社、226頁）

（２）宗教改革の歴史的位置

６．中世との連続性と断絶

「歴史的連続性の四つの線」（キュンク、199）

1) 修道院のカトリック的敬虔。ルターは「カトリック的信仰から引き継いだ最高ののものを守り抜いた」「義認論」「ルターの修道院の上長で改革的な傾向のあった、ヨハンネス・フォン・シュタウピッツ」

2) 中世的な神秘主義。「神秘家のタウラーを最も偉大な神学者の一人と呼び、彼を推薦しつづけた」「中世の神秘主義の伝統的な遺産」

3) アウグスティヌス神学。「ルターは、中世の神学の基本的な構成要素の一つ、つまりアウグスティヌスの神学との結びつきを保った」。「三位一体論」「キリスト論」「恩寵の神学」

4) オッカム主義。「オッカムやビールからルターの義認論に通じる道」

金子晴勇『近代自由主義思想の源流――16世紀自由意志学説の研究』創文社、1987年、
『ルターとドイツ神秘主義――ヨーロッパ的霊性の「根底」学説による研究』創文社、2000 年。

７．宗教改革のプログラム

1520 年。宗教改革の綱領文書の成立。

説教『よきわざについて』（信仰とわざの関係）、『キリスト教界の改善について　ドイツ国民のキリスト者貴族に与う』（教会改革の包括的なプログラム、万人祭司制、修道的生活・祭司独身性・贖宥などの廃止）、『教会のバビロン捕囚』（サクラメント論）、『キリスト者の自由について』（義認理解の総括）。

８．宗教改革のパラダイム（キュンク）

1)神学の諸概念の変化（義認、恩寵、信仰、律法）あるいは放棄（アリストテレス的な自然学・形而上学の諸概念)。

2)伝統的規範・基準の移動：聖書、公会議、教皇の勅令、理性、良心。

3)伝統的な諸概念に基づくサクラメント論などの諸理論全体が、スコラ学的な方法論（思弁的・演繹的）が動揺。

↓

「聖書的・キリスト中心的な新しい神学概念」へ

1)神の新しい理解。それ自体の神ではなく、われわれのための神。

2)人間の新しい理解。義人であり同時に罪人。

3)教会の新しい理解。信仰者の万人祭司制を基礎とする、信仰者の共同体としての教会。

4)サクラメントの新しい理解。自動的に作用する儀式ではなく、キリストの約束と信仰のしるし。

↓

９．市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

聖書の近代語への翻訳　→　西欧国民文化の基礎

聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立

／初等教育の普及（識字率）

10．近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤

宗教改革の精神　→　自立した個人と自由・平等（理念）

西欧的な政治と経済のシステム

近代議会制民主主義（リンゼイ・テーゼ）

近代資本主義・市場経済（ウェーバー・テーゼ）

近代科学（マートン・テーゼ）

11．近代的な世俗性への二面的な関わり

17 世紀までの過程の中で、近代世界の基盤（議会民主主義、資本主義、近代科学などの近代のサブシステム）は形成され、その背後に宗教改革的な精神性の作用が確認できる。しかし、一端成立した近代は、そのいわば母体であるキリスト教から自立し、それ自身の原理で動き始める（自律性、聖俗革命)。ここに、近代とキリスト教の二面的関係が成立する。とくに、18 世紀以降、近代精神はキリスト教への批判を強め（啓蒙主義)、キリスト教はそれへの対応を求められることになる。

18 世紀以降の動向は次のようにまとめられる。

・近代性への適合　→　世俗主義の台頭と譲歩

合理的な宗教思想（理神論やユニテリアン）

・近代的世俗性に対する批判運動（敬虔主義、メソジスト、ペンテコステ運動、さらにファンダメンタリズム)

（３）ルターのドイツ語訳聖書の意義

12．宗教改革の前提としての人文主義。原典・原語主義：近代の人文学は、原典主義を基本にする。これは、「知の歴史性」　を自覚した歴史主義を基盤にしている。

↓

聖書研究は、ヘブライ語とギリシャ語の原典でなされる。
・近代人文主義１：ウルガタ（ラテン語聖書）から、原典に帰れ。
・近代人文主義２：聖書の近代語訳（英語、ドイツ語、フランス語など）の推進。
cf. ヒューマニズムの多義性

13. 宗教改革・聖書主義のもたらしたもの：「聖書のみ」のスローガンの実現過程＝近代国民文化形成過程（翻訳・近代語・印刷出版・教育）
ルター訳聖書、欽定訳聖書：近代語、国民文学の形成へのインパクト
↓
ヨーロッパ文化理解の鍵としての近代語訳聖書。文化形成力としての宗教。

14. The two greatest influences on the shaping of the English language are the works of William Shakespeare and the English translation of the Bible that appeared in 1611. The King James Bible ---named for the British king who ordered the production of a fresh translation in 1604 --- is both a religious and literary classic.（McGrath,1）
「英語文化の形成に大きな影響を与えてきた聖書の名句」（寺澤、i）

14. 創造活動としての翻訳。翻訳は、それ自体が新しい創造活動である。
アントワーヌ・ベルマン『他者という試練』の第一章「ルターあるいは礎としての翻訳」
「聖なるテキストのドイツ化」「良いドイツ語で書かれたテクストを信者のコミュニティに供すること」「良いドイツ語とは民衆のドイツ語」
「同時に、彼らに聖書固有の話し方を伝えること」
「先験的に方言でしかない自分自身のドイツ語、すなわち高地方言で訳すこと。だか同時に、まさにその翻訳を通じて、一地域言語にすぎぬそのドイツ語を全国共通のドイツ語へと、一種の共通語へ高めること」、「一般化された民衆言葉」
「共通して用いられるべき文書体ドイツ語の創成と形成が翻訳作品を経由する形で行われたこと」「以降のドイツになぜ翻訳の伝統が存在するようになるか」
「ドイツ文化に固有の性質」

＜参考文献＞

１．ルター　『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。
２．金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。
３．Ａ．Ｅ．マクグラス『宗教改革の思想』教文館、『科学と宗教』教文館。
４．金子晴勇、江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。
５．徳善義和『マルティン・ルター――ことばに生きた改革者』岩波新書。
６．日本ルター学会編『宗教改革者の群像』知泉書館。
７．寺澤芳雄編著『名句で読む英語聖書――聖書と英語文化』研究社。
８．Alister McGrath, In The Beginning, The Story of the King James Bible and How It Changed a Nation, a Language, and a Culture, Anchor Books, 2001.
９．沓掛良彦『エラスムス――人文主義の王者』岩波書店。
10．河崎靖『ドイツ語で読む『聖書』――ルター、ボンヘッファー等のドイツ語に学ぶ』現代書館。
11．アントワーヌ・ベルマン『他者という試練――ロマン主義ドイツ文化と翻訳』みすず書房。